

銀行が地域とともに描く地方創生のかたち ～にぎわい創出の現場から～

京都
銀行

人口減少、少子化が加速する中、日本各地で観光推進、企業誘致、移住促進、スタートアップの創出など、国内外からヒトを呼び込むチャレンジが進められています。その取り組みの多くは、各地の地方銀行が様々な形でお手伝いしています。今回は、地方銀行が、地域の自治体・企業と連携して、まちのにぎわいの創出に貢献している事例を2つご紹介しましょう。



サッカーグラウンドとして利活用されている
旧天津小。



THE610BASEの校舎内。カフェやイベントスペースなどが整備され、地域住民が集う空間へ
とリニューアルされた。



THE610BASEのグラウンドに建つ7棟のイチゴ栽培のビニールハウス。

1 少子化の加速と廃校の増加

近年、少子化の深刻化に伴い、全国で廃校が増えています。毎年300校程度が廃校になっているとのデータもあります。

こうした中、京都府北部の福知山市と京都銀行が連携して開始した、廃校となった小学校の土地や建物と、それを活用したい民間事業者をマッチングし、地域ににぎわいを生み出す取り組みが全国から注目を集めています。

2 バスツアーで事業者と廃校をつなぐ

福知山市では、小学校の統廃合を進めた結果、2020年時点で16の小学校が廃校となりました。市にとって、建物の維持管理費等が負担となる等の課題があり、「福知山市公共施設マネジメント計画」に基づき学校跡地の活用を進めていくことになりました。

福知山市から相談を受けた京都銀行は、まず取引先約1,300先に対し、廃校活用に関するニーズ調査を実施。365社から関心ありとの回答が得られたことから、2020年10月と11月に、関西初の「廃校マッチングバスツアー」を開催しました。

この2回のバスツアーでは、30名の定員に対して福知山市内外から約120名もの応募があり、関心の高さがうかがえました。想定を大幅に上回る約80名が参加し、活用候補先の廃校の視察や市担当者との意見交換を行いました。ツアーに参加できなかった企業に対しては個別の引き合わせも実施しました。また、2021年度はバスツアーに加えて、「アイデアプラッシュアップワークショップ」（マッチングにとどまらず、事業者とともに廃校活用のアイデアを練り上げるワークショップ）等の伴走型支援プログラム、2022年度は「廃校活用事例ツアー」を開催する等、企画内容も工夫しました。その結果、2020年度～2022年度までに約100社を福知山市へ引き合わせることができました。

3 廃校がにぎわいを生む場所へ生まれ変わる

福知山市によると、京都銀行によるマッチング以外のルートで活用が決定したものも含め、16の廃校のうち8校が、民間事業者に売却・賃貸されることとなり、地域に新たににぎわいを生む場所へ生まれ変わりました。イチゴ農園やクラフトビールの醸造所等を併設する複合型農業体験施設、着物のレンタル事業を営む企業の倉庫・配送センター、サッカー等のスポーツ施設、キャンプ場などの事業が開始され、多様な価値を創造しています。

また、廃校の売却益と賃料収入により、同市の歳入は、これまでにトータルで約1億5,000万円増加し、一方、歳出は、維持管理費等の圧縮により年間約1,000万円の削減につながり、市の財政にも大きなインパクトを及ぼしています。

今回の取材のため、廃校から生まれ変わった施設の1つ、中六人部（なかむとべ）地域にある複合型農業体験施設「THE610BASE」（ムトベース）を訪問しました。2020年に開業した施設で、イチゴ狩りや農業体験ができるほか、併設されているカフェでイチゴをつかったスイーツや醸造したクラフトビールを楽しむことができ、いまでは年間20,000人以上が訪れる人気スポットです。校舎の昔なつかしい雰囲気はそのままに、おしゃれな照明や壁面ペイントが施され、思わず写真を撮りたくなるような“映える”空間になっています。

福知山市の担当者は、京都銀行のバスツアー等によって、廃校活用に関心のある多くの事業者に複数の廃校を一度に紹介できたことは有意義であったと話します。

2024年度以降は、福知山市、京都銀行に加え、京都総研コンサルティングが参画し、3者による公民連携の取り組みはさらに強化されています。バスツアーにとどまらず、未利用公有財産の活用やスマートコンセッションについて学ぶフェアも開催しました。また、閉園した保育園などの活用に焦点をあて、最優秀賞受賞者に対し対象施設が無償譲渡される「ビジネスプランコンテスト」を実施するなど、地元自治体と地元金融機関のタッグによる新たな挑戦が続けられています。



今も現役で稼働する日本最古の三連水車。



特注で製作したハンドフィル機。



SHINDO LAB。約5,500坪の敷地には蒸留所のほかワイナリー等も併設。

1 地方銀行が地元の観光を盛り上げる

福岡空港から車でおよそ1時間。福岡県朝倉市は、秋月城下町、日本最古の農業用水車「三連水車」をはじめとする歴史的な街並み、筑後川の豊富な水資源を活かした葡萄、白桃、梨といった多様な特産品など、自然と歴史が調和した、見どころにあふれた町です。

こうした多様な魅力をもつ朝倉市ですが、コロナ渦により減少した観光客を呼び戻すため、若者を含む多様な世代にアプローチし、観光消費額を伸ばすことが課題となっていました。そこで、福岡銀行と地元企業が連携し、観光客を呼び込み、まちににぎわいを創出する取り組みがはじめました。

2 地方銀行と老舗酒造メーカーのタッグ

この取り組みの中心となった地元企業の1つである（株）篠崎は、江戸時代から続く老舗の酒造メーカーです。日本酒にとどまらず、麦焼酎やワインを造るなど、常に新しい挑戦を続けてきました。そして、新たな事業の柱としてシングルモルトウイスキー造りに着手。原料にも造り方にもこだわったウイスキー造りを進め、2025年6月に1作目をリリースしました。

このウイスキー造りの拠点となるのが、2021年6月に完成した「SHINDO LAB（新道蒸留所）」です。ウイスキー造りをはじめるに至ったストーリーや製造過程を詳細に学ぶことができる蒸留所見学ツアーの実施、見学後の試飲やハンドフィル（ボトル詰め）体験ができるコンセプトショップの開設など、自社のブランドを強く訴求するとともに、朝倉のにぎわい創出の一翼を担う、新たな観光拠点を目指しました。こうした取り組みが評価され、同社は観光庁の「地域観光新発見事業」の採択を受けました。

3 朝倉の観光地としての魅力を磨き上げる

福岡銀行は、朝倉を盛り上げる同社の取り組みを観光資源の核と位置づけ、事業計画や数値目標の策定等、金融面にとどまらない多様なサポートを実施。「地域観光新発見事業」採択後も、見学後のお土産としてウイスキーを練りこんだチョコレートの開発、グループの設計・デザイン会社によるティスティングブースの製作など、足掛け5年以上、同社と伴走してきました。

これに加え、福岡銀行は、“水の町、歴史の町朝倉”的観光地としての魅力を磨き上げるため、2024年12月、朝倉市や旅行代理店と連携し、インフルエンサーや旅行の専門家等を招いたモニターツアーを実施しました。蒸留所見学を日程に、秋月城下町での和紙漉きや草木染め体験、朝倉の名湯として知られる原鶴温泉での入浴等を味わってもらったりうえで、フィードバックを受けました。こうした取り組みが結実し、朝倉を巡るバスツアーの一般向け販売が始まっています。

朝倉市は、大宰府と大分県の湯布院、日田などの間に位置しています。福岡銀行の担当者は「プロモーションやコンテンツの磨き上げにさらに力を入れ、有名な観光地の間にある立地を生かし、朝倉に立ち寄ることを定番化したい」、（株）篠崎の社長も「スコットランドでは、どこの蒸留所にも見学コースがあり、歴史や製造方法を含めてブランド化している。当社もモニターツアーのフィードバックを踏まえ、ウイスキーの魅力をより五感で体験してもらうために工夫を凝らしたい」と話します。

「SHINDO LAB」で製造過程やウイスキー造りへの思いを伺った後で体験するウイスキーの香りと味は格別です。優しい甘味を感じさせる朝倉の水の味にも感動しました。

皆さんも九州にお出掛けの際には、朝倉に足を運んでいただき、水の恵みや伝統文化を感じてみませんか？